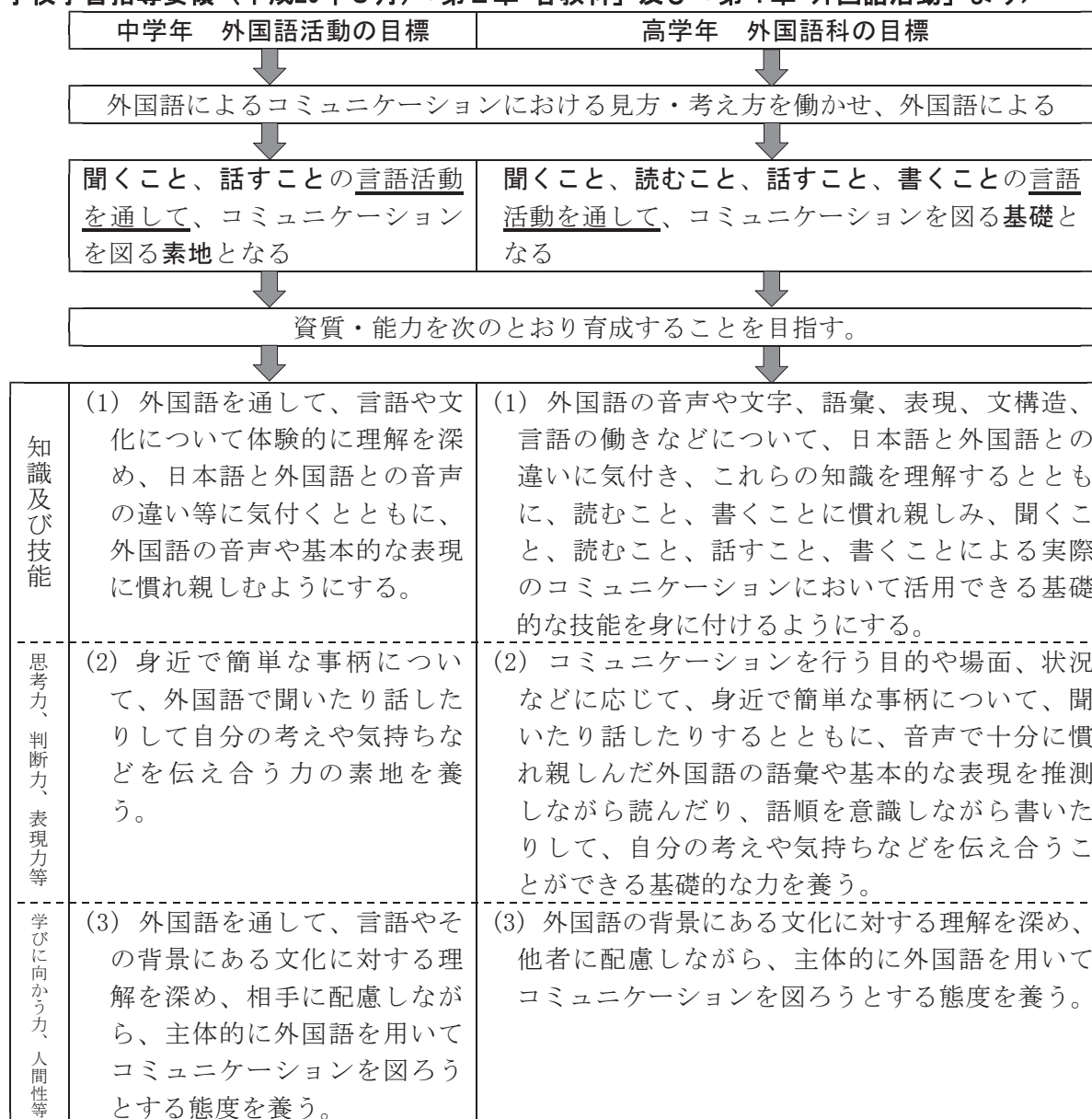


5 小学校における外国語教育

(1) 外国語活動・外国語科の目標

〈小学校学習指導要領（平成29年3月）「第2章 各教科」及び「第4章 外国語活動」より〉



「外国語を使って何ができるようになるか」という観点から、小・中・高等学校を通じた学習到達目標の設定や、言語活動を通じた指導の充実が求められている。

(2) 授業実践に向けて

① 「外国語活動」及び「外国語科」における言語活動を充実する

「小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック」（平成29年7月）に、以下の記載がある。

言語活動は、「実際に英語を用いて互いの考えや気持ちを伝え合う」活動を意味する。

言語活動は、言語材料について理解したり練習したりするための指導と区別されている。

実際に英語を使用して互いの考えや気持ちを伝え合うという言語活動の中で、情報を整理しながら考えなどを形成するといった「思考力、判断力、表現力等」が活用されると同時に、英語に関する「知識及び技能」が活用される。したがって、英語を用いず、日本語だけで情報を整理しながら考えなどを形成する活動は、外国語活動や外国語科においては言語活動とは言い難い。発音練習や歌、英語の文字を機械的に書く活動は、言語活動ではなく、練習である。練習は、言語活動を成立させるために重要ではあるが、練習だけで終わってしまうことのないように留意する

必要がある。

言語活動を充実させるためには、「コミュニケーションの目的や場面、状況等が明確で、教師と子供がそれを共有していること」、「児童が、誰に、何のために自分の考えや気持ちを伝え合うかを十分に意識できる場面設定や題材であること」等が大切であるとともに、初めて外国語に触れる小学校段階では、身近で簡単な事柄について簡単な語句や基本的な表現を用いることが大切である。

中学年では、体験を通して理解を深めること、高学年では、「読むこと」「書くこと」については慣れ親しみであり、「聞くこと」「話すこと [やり取り]」「話すこと [発表]」に求める技能と同等ではないことに留意する。

② 単元構成を工夫する

- ・単元の最後に目指す児童の姿や児童に身に付けさせたい力をしっかりとイメージし、その姿を具現化するために、単元の終末にどのような言語活動を設定すればよいかを考える。
- ・単元のゴールに向かって、どのような言語活動を塗り重ねていけばよいか考え、1 単位時間ごとの目標を決める。そして、各単位時間の目標に沿って、時間配分や評価場面も考慮しながら学習活動を組み立てていく。
- ・児童の発達段階や興味・関心に沿った、思わず「言いたくなる」「聞きたくなる」「やってみたくなる」ような、児童にとって必然性のある言語活動を設定する。
- ・コミュニケーションを行う目的・場面・状況等を明確にした言語活動を設定する。

③ Small Talkを進める

Small Talkは、2 単位時間に 1 回程度、あるテーマのもとで指導者のまとまった話を聞いたり、ペアで自分の考えや気持ちを伝え合ったりする高学年に設定されている言語活動である。既習語句や表現を繰り返し活用することと、対話を続けることをねらいとしている。Small Talkを行う際は、自分自身に関する出来事や気持ちなどについて、児童とやり取りしながら進めることが大切である。

(3) 「指導と評価の一体化」のための学習評価

目標及び指導と評価は表裏一体とよく言われる。学習指導要領の趣旨を実現するためには、学習評価の在り方が重要となり、児童の学習改善や教師の指導改善につながるものにしていくことが求められている。

総括評価（評定）をするに当たって、3 観点×5 領域で15個（中学年は3 観点×3 領域で9 個）の情報が必要になるが、これら全てを1 単元や学期末等に一気に見取することは不可能である（【図1】参照）。

授業を行う中で児童の学習状況を適宜把握し、指導の改善に生かすために、観点別の学習状況についての評価を、内容や時間のまとまりごとに、学習状況の把握ができる段階で行うなど、評価する時期や場면을精選することが重要となる。【図2】を参考にしたい。

また、学習評価の方法として、行動観察や振り返りシート、ペーパーテストやパフォーマンステスト等、それぞれの特性を踏まえ、多様な方法で多面的・多角的に評価を進める必要がある。

5つの領域ごとの観点別評価の考え方						指導要録に記載 (学年末)	
	聞くこと	読むこと	話すこと [やり取り]	話すこと [発表]	書くこと	観点別 評価	評定
知識・技能							
思考・判断・ 表現							
主体的に 学習に取り組 む態度							

学年末に評価を総括し、指導要録に記載する際に全ての評価情報が揃っていればよく、**各単元ごとに、全ての領域・観点について記録に残す評価を行う必要はない**
ただ、各単元において3 観点をバランスよく見ることは重要

【図1】令和元年度教育課程研究協議会資料より

We Can! I Unit 2 における「聞くこと」「話すこと」「やり取り」の評価場面			
時	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
1			
2			
3			
4	指導者の話を聞く		
5	(LW&T5)	LW&T5	
6	ACT2		
7	(ACT2)	ACT2	

【図2】「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料より

(4) ICTの活用について

外国語活動及び外国語科において、児童の興味・関心を高め、言語活動の充実と言語活動を通じた指導の効率化を図るために、一人一台端末等ICTを活用することが大切である。児童の発表ややり取りの様子を録画・録音し、児童自身の自己評価や児童同士の相互評価、指導者側の学習評価の場にしたり、言語活動の設定において、コミュニケーションを行う目的や場面、状況をよりリアリティーのあるものにするために、国内や海外の遠隔地にいる人とWeb会議システムで交流を行ったりする等の活用が考えられる。また、学習者用デジタル教科書については、家庭学習や個別学習での効果的な活用が期待されている。



※ 1

文部科学省では、「外国語の指導におけるICTの活用について」の解説動画^{※1}のほか、「はじめての学習者用デジタル教科書～小学校・外国語編～」^{※2}も配信している。外国語教育におけるICTの効果的な活用や学習者用デジタル教科書の活用方法を知るための参考となる。



※ 2

(5) 指導形態について

教員の指導形態については、学級担任が指導する場合と一定の英語力を有した専科教員が指導する場合に大別される。小学校外国語教育の特性を踏まえ、専科加配がある場合、校内全体の英語指導力の向上に向けた校内研修を行ったり、学級担任と専科教員等とが課題を共有し、共に課題の解決方法を考えるような場を設定したりする等、各学校の実態に応じて学級担任による指導と専科指導を両輪と考え、活かすことが重要である。

また、ALTやJTEとのティーム・ティーチングについても、児童のコミュニケーション意欲や学習意欲の向上等といった役割を十分に考えた上で、学級担任や専科教員との連携を図りながら、その効果的な活用について考え、推進する必要がある。

(6) 英語指導力向上に向けて

学習指導要領の趣旨を生かした授業を展開するには、指導者が学習指導要領や教材、教科書、そして指導法などについて、十分に理解する必要がある。文部科学省では外国語教育に役立つ情報を一元的に提供するポータルサイト^{※3}をWebサイト上で公開している。



※ 3

YouTube mextchannelには、「外国語教育はこう変わる！」シリーズ^{※4}に、「なるほど！ なっとく！ 小学校外国語」シリーズが加わり、小学校外国語の指導に関わるポイントを分かりやすく解説した動画が配信されている。二次元バーコードを読み込み、職員会議や校内研修の最初に視聴するなどの活用ができる。



※ 4

<参考（引用）文献>

- ・「小学校学習指導要領」 平成29年3月 文部科学省
- ・「小学校学習指導要領解説 外国語活動・外国語編」 平成29年7月 文部科学省
- ・『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料 小学校 外国語・外国語活動 令和2年3月 国立教育政策研究所
- ・「小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック」 平成29年6月 文部科学省

※1 「外国語の指導におけるICTの活用について」

文部科学省 YouTube mextchannel

※2 「はじめての学習者用デジタル教科書～小学校・外国語編～」

文部科学省 YouTube mextchannel

※3 「文部科学省 外国語教育」 文部科学省

https://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/index.htm

※4 「外国語教育はこう変わる！」 文部科学省 YouTube mextchannel

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLGpGsGZ3lmbCsze5PvMhQ1TS-jXEZKA4f>